

戦争が駆け足でやって来る！ (その13)

「法的安定性は関係ない！」は安倍の本音を代弁しただけ？

磯崎陽輔首相補佐官は、集団的自衛権の行使容認について「法的安定性は関係ない」と発言したことで、8月3日参院特別委で謝罪し発言を撤回したが、辞任は拒否した。

しかし磯崎は、安倍のブレーンとして今回の「戦争法案」を作成した中心人物であり、まさに安倍の「本音」を代弁したにすぎない。彼らはこれまでも「憲法より安全保障（軍事行動）が大事だ」と常に言っていた。つまり「安保政策を自在に展開するためには憲法の制約はない方がいい。」という立憲主義を軽視する考え方が根底にある。

そもそも安全保障の観点で国民を守るのは個別的自衛権の行使で十分である。集団的自衛権の行使は海外での戦闘行為に参戦することで、国土防衛は手薄となり、逆にテロを招くことにもなる。まさに国民にとっては安全が脅かされる事態ではないのか？

本当に集団的自衛権が必要ならば、国民投票で憲法改正の審判を受けるべきである。また安倍は磯崎の発言にたいして「与党に迷惑をかけ申し訳ない。」と国民にたいしての謝罪をしていない。

「戦争に行きたくない」は自分中心？利己主義？…武藤貴也

さらに自民党衆院議員の武藤貴也（滋賀4区）は、「戦争法案」反対デモを国会前で続ける「シールズ」（自由と民主主義のための学生緊急行動）に対して、自身のツイッターで「彼ら彼女らの主張は『だって戦争に行きたくないじゃん』という自分中心、極端な利己的考えに基づく」と非難した。この発言にたいしてインターネット上では「国に言われたら戦争に行くのが正しい姿だと言ってるに等しい」などの批判が集まっている。

これに対して武藤はフェイスブックで「法制に反対するのは真の平和主義に忠実とは言えない」と反論。「世界中が助け合って平和を構築しようと努力している中に参加することは、日本に課せられた義務であり、正義の要請だ」と説明した。

シールズのメンバーたちは「戦争が嫌だというのは、個人の考えだけでなく、みんなの思いでもある」「個人が重んじられる社会が許せないんでしょう。自民党の改憲草案にある全体主義的なものが垣間見える気がする」と反論している。

まさに彼が主張する「真の平和主義」とは、集団的自衛権で米国の戦争に日本も参戦することである。アフガンでイラクで平和は構築されたのか？戦争を仕掛けた米国は、4486人の戦死者を出し、今は無人機で攻撃をかけている。そして未だに混乱は続いている。まさに「武力で平和はかち取れない、殺された憎しみは、さらなる殺戮の連鎖へと続く」

安倍が「戦争法案」を「平和関連法案」と言うように、武藤が安倍の思いを代弁したに過ぎない。